

## 後記 雑感

▽本誌第十七号を贈ります。寸評なりお寄せ願いたく存じます。また執筆諸氏の御苦労には心から感謝をいたします。

▽一年に一冊ずつの積み上げですが、本誌も十七冊目。この間の執筆者は延二四六名、収載原稿一七五篇、総頁三〇三三頁に達しています。他に別冊三冊、総頁で六〇五頁があります。

▽年一冊でも、年々の累積はいつか相応な価値を示すものとなつてきています。単に量のことばかりでなく、内容的にも

たとえば本誌のバックの揃いものが、かなりの高値であることなど、手前みそながら、一応のことかと存ぜられます。

▽一つの機関誌をもっていることはそれをよい機縁として、ある研究なり紹介なりが、企てられ、まとめられることになります。

▽そもそものが、図書館という職場の特質上、△図書館紀要△的性格のものは自然に必要とされてきますし、またそれだけの水準は常に保持され、さらには高められていくことが理想でありましょう。

▽このことは、計らずも、本誌が第三号までの発行において、私立大学図書館協

会賞を受けえた、その消息にも通じるものでありましょう。

▽さて、右述は、この本誌発行の発意者、生みの親であられた元本館館長大野實雄先生が、この三月、法学部教授より定年退職せられることとなられたため、ここに改めて記し、先生への心からの感謝を申し上げたい意にほかなりません。

▽その他先生の館長時代およびそれ以後における館界への多大の御尽力御功績に對し、館員一同と共に深い感謝を捧げ、ますますの御健康と御多幸をお祈り申し上げます。 (原圭之助)

大野實雄先生がこの三月末をもつて定年ご退職となつた。大野先生は第六代の図書館長として、昭和三十三年十月から三十九年九月までご尽すい下さった方である。この間、大学図書館の近代化のために特にお力をつくされたと共に、館内でも数多くの業績をのこされている。本紀要が大野先生の手によって誕生したことは、前号の後記雑感で触れたとおりであるが、この欄をかりて先生に心からお礼を申し上げたい。紀要第一号が発刊された昭和三十四年当時、館内には「図書館学研究會」なるものがあつて、月一回の定例研究発表会を開くと共に、館員の

調査研究報告や館内各係の業務紹介等を含め、ガリ版刷の小冊子にまとめて発行してゐた。「紀要」は一時その「会報」とならんで刊行されたが、その後、同研究会は諸種の事情で休会の形となつてしまい、結果的には「紀要」は同会報を包含した形で、活字版の学術的刊行物として広く学外の大学図書館、研究機関にまで配付されるものとなつた。「紀要」刊行は、館員の研さんと努力の結晶を公に発表しうる場として大きな意義があるし、又本館の名を館界に一層高めることにもなつた。けれども、一方ではそれが大学図書館の刊行物として学外にまで配布されることから、そう安易に原稿をしたために、くいことになつたことは否定できない。館内の各係業務の紹介とか、卑近な情報交換の場としては「会報」的なものの再刊も必要ではないか、と最近感じている。 (川上一)

薦の若葉におおわれた図書館は、いかにも床し格別な味わいがいたします。新入生を迎えて、種々の催しに賑やいだキャンパスも、今では静かに授業がおこなわれ、図書館に通う学生にも新しい顔が目立つようになりました。学術研究の進歩と大学教育の発展とに

対して、図書館のもつ役割りは大きいと言われています。その役割りを十分に果たすには、資料の増大、業務活動の多様化等による施設、設備の充実が本館の急務であります。しかし今日では、図書館相互の協力がなければ十全のサービスは望めないであります。このような環境の変化に対応しての、組織や業務の改善などにも、地道な努力を積みかさねていくことが必要であります。

本紀要も十七号を数えることになりました。昭和三十四年第一号の発刊から十六年余の歳月が過ぎました。一つの本を発行するということは、なかなか骨の折れるものです。これをつづけるにはそれなりの労苦を伴いますが、何よりも館員の努力と研鑽と、ご執筆いただきました諸先生方のご支援によるものであります。

「紀要」の創刊にご尽力下さいました元図書館長、大野實雄先生はこの春定年を迎えられ大学を去られました。「……小さかった葛もただ今では仰ぎ見る大木となりましたように、この紀要も健や木に生長してほしいものです」と結ばれている第一号に寄せられた巻頭の言葉をいまここに想い起こします。

(寺本辰雄)

去る三月、定年制により教壇を退かれ

た大野実雄先生が、館長御在任中にこの紀要を創刊された趣旨は、私たちに對して、図書館員としての力量の向上を期待されたものに他ならない。

私たちは、いうまでもなく現場の実務家なのであるが、この実務遂行のためにも、学究的態度が望まれるのである。

図書館が取扱う資料には物的形態の面とともに、記録内容の面がある。そこでこの内容の利用のために、これを分析しようとするれば、語学力や古文獻の読解力などと並んで、各主題分野の専門知識が必要になる。そして同時に、資料自体に關する知識や、資料処理または文獻情報処理の理論・技法としての図書館学が不可欠のものとなる。

このような多方面にわたる自己研鑽に努め、その成果をこの紀要に発表していくことが、大野先生の激励におこたえするひとつの道であらう。

(高宮秀夫)

▽心耳を澄ませせての洞見、洞察。——その時、勝れた人の脳髓の奥に閃くもの。これが一つの歴史の端初となり、動因の根源となるものでありましよう。

▽かつての日、就任早々の大野實雄元本館館長は、休刊中であつた当館月報をす

ぐさま復刊せしめ、また本図書館紀要の創刊を思い立たれ、これを実現せしめられた。図書館の本質に立脚洞見せられての信念の所産と申し上げるべきところのものでありましよう。

▽大野館長の館内外にわたる実績は、すこぶる広範多岐、ここに枚挙のいとまはありませんが、当館月報も二百号を超え、本紀要も十七号。この間の本誌の執筆者、掲載論稿、頁数は、原事務長の集計のとおりであります。

▽今号より、創刊号の大野元館長の巻頭言を、毎号の巻頭にくり返し掲載しては、との古川現館長の勧めがあつた。これにより、創刊の趣意は常に闡明に示されることとなり、館員諸氏のいつそあの発意のよすがとなることが期待されます。▽さて、凡、非凡といふも、時にその区別は定かではありません。だれでもが、まず気軽に、軽口で、脳裏の閃きを發言し合つてみたいものです。

(茂木雄秀)

早稲田大学図書館紀要 第十七号

昭和五十一年三月二十日 発行

編集兼

発行人

原 圭之助

印刷所

早稲田大学印刷所

発行所

早稲田大学図書館